



ウィーンの市内にある、ミハエル・ローリング氏のアトリエ。鮮やかな色遣い。外に架けられたカヤックは、なんとローリング氏の自作。舟づくりは氏の趣味という。

# Saint Crispin's

サン クリスピン

ウィーン発ルーマニア経由の靴が目指す地平。

靴職人の守護聖人の名を冠したその靴は、その名を裏切らぬ佇まい。  
具現化の現場には、ふたつの国を行き来し最善を求める、ひとりの男の存在があった。

太田隆生=写真  
photographs by Takao Ohta  
coordination by Michael Laschan  
text by LAST



ルーマニア・ブラショフの工房にて  
最終検品中の靴たち。  
その「バラバラ」感が、工房の靴づくりを窺わせる。



ビスポークの靴づくりは、こうして木製ラストを修整し、パターンを起こして、トライアルをつくる。採寸はローリング氏が行うという。



かつてローリング氏のもとで靴づくりを行っていたという、トルコ人職人・ゼッキー氏の手がけた靴がアトリエに残っていた。丸いシルエットがウィーン調である。

# 日

本では、製作こそルーマニアだが、オーストリアの、ウィーンの靴と認知されているサンクリスピン。だがウィーンの街中で、その姿を見つめることは難しい。住所を頼りに訪ねた先も、住宅地のような街区の一角の、何の変哲もない建物だった。ショップはおろか、ショールーム的なものすら、表からは確認できない。ドアの向こうに案内されると、中庭に青く塗られた小屋が見えた。どうやらここがサンクリスピンの中枢のようだ。

取材班を迎えてくれたのは、ミハエル・ローリング氏とフィリップ・カー氏。ローリング氏が靴づくりやブランドのデザインを、彼の従兄弟であるカー氏がマネージメントを担当している。

小屋のアトリエには、靴の他に革やラスト、それにラストの加工をする器具などが置かれている。過去にはここでラストメイクを行っていたが、現在はアイデアを練ったりする場合にラストを削る程度で、靴づくりのほとんどはルーマニアで行っているとローリング氏は語る。話はまず、ローリング氏の現在に至る経緯から始まった。

「ウィーンの芸術大学で、インターナショナルデザインを学び、卒業後は事務所を構えてプロダクトデザイナーとして働きはじめました」

と、いっても仕事は決して多くなく、また自身でもプロダクトデザインの仕事に関してどこか懐疑的だったという。やがて80年代前半、27歳の時に、ウィーンの靴店ルーディック・ライターからデザイナーのオファーが来る。その当時、同社は危機に瀕し、若い世代の社長による変革が行われようとしていた。訪れた工場の色然とした雰囲気は強く惹かれたローリング氏は、その要請を受ける。もつ

とも、靴のデザインの経験はなく、当初は工場での靴づくりを学びながらの仕事だったという。盛時は100人いた従業員も12名程度に減り、営業活動もままならなかったことから、デザインを手がけた靴を持ってローリング氏自ら専門店を巡る。しかし結果は惨憺たるものだった。ただ、その過程で、ローリング氏が履いていた靴には関心が集まっていた。その時彼が履いていたのは、彼の祖父が使っていた、ウィーンの古いシューメイカーによるハンドソールの靴。そこで彼は、その靴をベースにしたデザインの靴をつくる。それは靴の専門店のみならず、服のショップなどからもオーダーが入り、ルーディック・ライターはドイツやオーストリアの中でちょっとしたブームとなったのだった。

「そんなある日、工場でゼッキー氏という、元々ウィーンのシエラ靴店の仕事をしていた職人と親しくなりました。彼は



ミハエル・ローリング氏とビジネスパートナーである従兄弟のフィリップ・カー氏(左)。カー氏は主にマネージメントを担当している。

私に、どうやったらいい靴が出来るか見せてあげよう、と言ってきたんです」

ローリング氏は彼に革とラストを与えた。彼のハンドメイドの靴づくりを見ることで、ローリング氏は機械を使わない靴づくりの良さを認めたという。

その後、ルーディック・ライターを辞めたローリング氏は、シューズデザイナーとしてイタリアやスペインのシューズ



工程には、熟練した手作業が随所に見られる。パンチングの穴を開ける工程もハンドで行っている。ほとんど下描きなどせず、見当ですばやく穴を開けていく。



ローリング氏のもとで15年ほど職人として働くヴァジリ氏。現在はメイキングとクリッキングを担当している。兄弟や妻とともに靴職人として働いている。



ルーマニア・ブラショフ郊外の工房でまず驚くのがサンクリスピンのシューツリーを工房内で手がけていること。ラストも担当するという職人が大胆に削っていく。

ウェルディングを終えたところ。  
サン クリスピンでは木や金属のシャンクを使わない。  
ソール同様にレイデンバッハ製のベンスを使う。  
等間隔のベイス(木釘)が丁寧な作業を物語る。



シューツリー用の木材。ブロックを  
このようにラブにカットして、削り出す。  
素材はクルミ、サクラなど。  
最近はスギに移行しているという。



イタリアのタンナーのものという。  
プレタボルテのインソール用部材。  
ビスボークはレイデンバッハのベンスを削って使う。  
とはいえこの部材も、品質は申し分ないという。



現在プレタボルテで使われている  
メインのラスト4種。  
底面形状にも配慮した  
プラスチック・ラスト。



木製のラストはビスボーク用。  
プラスチックのラストはプレタボルテ用。  
プレタ・カスタマイズはプラスチックに  
乗せ甲をするというやり方。



新作のブーツのためのパターン。  
ビスボークやサンプルは紙のパターンを使う。  
その大きさを、一枚革のアップラーが  
容易に寝える。





昨年引っ越したという、工房の様子。ブレタポルテが主体とはいえ、ハンドソーンウェルテッドであり、靴づくりのほとんどが手作業だ。

生産現場には戻さずに、アカデミーのよ

事をしていた際に、ローリング氏はオー  
ナーのアントニオ・モレットティ氏から、  
ルーマニアでいい靴をつくれなにかとい  
う相談を受ける。そこで彼はルーマニア  
に渡り、既存の工場から職人たちをヘッ  
ドハンティングして、自身が設立した会  
社に招き入れた。そして、ハンドウェル  
ディングまでを行った半完成品の靴を生  
産し、アルファンゴ社に納入しはじめた。

このルーマニアのファクトリー設立の  
際、ローリング氏が注力したのは、職人  
たちの教育システムだった。生産をはじ  
めて1年後、優秀な職人を2名選び、靴  
づくりの全工程を教育。そして、彼らを



ソールを濡らす作業も、簡単にバケツにて。  
10数名の職人たちがマルチタスクで  
週で30~40足程度の靴を仕上げている。

メーカーの仕事をお願いしようになる。  
その一方でゼッキー氏との再会と別れ、  
ハンガリーでグッドイヤーウェルテッド  
製法の靴をつくるプロジェクトの失敗な  
どを経て、英国靴業界の重鎮ランス・ク  
ラク氏とインドにて100%ハンドメ  
イドの靴づくりをスタートさせる。これ  
が「サンクリスピン」という名の靴の  
誕生だった。しかし気候や文化の差など  
の問題で2年ほどで頓挫。その後ハンガ  
リーのヴァーシユに生産を依頼するもの  
の軌道に乗らず、ローリング氏はハンド  
ソーンの靴づくりからは一旦離れ、デザ  
イナー職に戻ったのだった。

ある時イタリアのアルファンゴ社の仕



ウェルティンはプレタポルテもビスポークも、全てハンドソーンにて行う。糸は意外にもナイロン製。ローリング氏の検討の結果だ。



ビスポークの場合、中物のくせづけもこのように丁寧に。プレタポルテはアッパーと同時につり込む。



ソールをならすためにハンマーで叩く。サン クリスピンの場合、ウエスト部の底づけはペイスを使ったものになる。



サン クリスピンでは、ヒールはすべて一足一足積み上げてつくる。平らなガラスに乗せそのバランスを見る職人。



1950年代のものという、底づけのマシン。ガイドが穴を開けた後に針で糸を通す仕組み。この機械の使用が、ペイスとの併用を生んだ。



これもまた丁寧な作業の一例。ローラーでインソールの部材に圧を加えている。こうすることでより密度が高まり、剛性が上がる。

「今のサンクリスピンの靴がつかれるようになるのに、この20年が必要だったと思います」  
こう語るローリング氏の靴づくりを端的に表現するならば、状況に屈せず、それを逆に利用してよりユニークな、それでいてより高いものを目指すことといえる。そのスタンスはまた、ルーミアニアはブラシヨフ（クロ

**20年の成長が実現する  
丁寧かつ実直な靴づくり。**  
ローリング氏が長々と自身の歩みについて語ったのは、それがまた、現在のサンクリスピンのものづくりに繋がっているからでもある。

その後ローリング氏はこの会社をモレッティ氏に売却。だが前述の教育係だった2名の職人はローリング氏を慕い、氏も再びハンドメイドの靴づくりを決意する。2003年にはカー氏が加わり、2004年にはウイーンで会社を設立。現在のサンクリスピンのこの時誕生したのだった。

うなシステムで、他の職人に修得した靴づくりを教えるようにしたという。こうした教育システムの過程でつくられる100%ハンドメイドの靴にはまた「サンクリスピンの」の名が冠せられた。



仕上げのポリッシングは、手間のかかる仕事。1時間の作業の効率化と美しい仕上げのため独自の配合のワックスを用いている。



工房にて、総務系の仕事からパターンまでをこなすクリスチアーナさんと語るローリング氏。彼女はローリング氏の片腕的存在だ。

**DATA**  
http://www.saint-crispins.com  
またはユナイテッドアローズ 原宿本店 メンズ館  
tel.03-3479-8180

「毎年デザインを変えるよりも、持っているものを出来るだけ成長、進化させながら変わっていくことが大切なんです」  
ローリング氏はまた、次のように語る。

「周りにそれが出来るところがなかったため。早くて安い方法は自分のところで行くことだった」と、恬淡なコメント。そこにはハンドメイドを声高に謳うという姿勢は感じられない。その合理的製品哲学は、プレタポルテやプレタ・カスターマイズ（パターンオーダー）にはプラスチック製のラストを繰り返し使い、ラストの肉付けなどは数値で管理するなどといったところにも反映されている。

「こういうデザインは美的要請で考え出したものではありません。この方がつくりやすい、履きやすいという観点から、デザインが出来上がってくるのです」  
自社の工房にて、職人が木のブロックから削り出すシューツリーについても、

ンシユタット」の工房を訪れた時に、具体的な例とともに明らかとなった。